

109番目の女神

猫の休日

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

皆様お久しぶりでございます。ターニャ・デグレチャフでございます。さてさて、私の記憶が正しければではありませんが、私は死を迎えたはずですがはてさて。ここは見覚えのある白い空間ですね。またあの悪魔でしょうか。

はて？ 次の実験？ いや、少し待っていたきたい。いくら私が信仰心が目覚めなかったからと言っても、これ以上は横暴と言えることでしょうか。何々？ 非科学的世界で、女で、戦争を知り、追い詰められて尚信仰心が芽生えないのであれば、神を信仰しなければ戦うことすらままならない世界へ転生させ、信仰が芽生えないか試す…だと!?! ぶざけるなこの悪魔め！ ああまで、畜生！ クソツタレ存在Xに災いあれ！

※作者はあらすじを書くのが苦手なので、少しでも興味を持っていただけたら覗いて
やってくれると嬉しいですよ。

目次

1	プロローグ	1
	――	――
	孤児院と噂	4

プロローグ

まただ。またなのか。

そう怒りで身を震わせながら、私は手を強く握りしめる。

何となくではあるが、そんな気はしていたのだ。かつてのあのままならぬ感覚、もがき苦しむしかない苦痛は、意識をたやすく混濁させる。

目を覚ました時には確信した。ああ、またなのかと。灰色のぼやけた世界。ピントの合わない眼鏡で眺める歪な世界。輪郭すらはつきりとはおぼつかない色の混濁した世界は、これで二度目になるというのに酷く心もとないものだった。

前回は客観時間3年ほどの時間が過ぎ去った頃ようやく、私という自我の形を取り戻したわけではあるが、今回は少なくとも3年は過ぎてはおらず、しかしておよそ2年と半年ほどの時間は過ぎ去って、自我の形を取り戻した。

今では少し懐かしくもある。自我を取り戻してはじめて覚えたのは、純然たる混乱であつたか。初めて耳にしたのは嬰兒の泣き声。私は恥ずかしくも、この声にみつともないなどどという感情を抱いたことを覚えている。確か記憶の奥底に放り込んだこの記憶を思い出したのは、これが2度目——いや、3度目になるからだろう。

いやはや、しかし記憶というのは不思議なもので、この状況に既視感すら感じる。前は確か山手線のホームであったが、記憶にあるのは質素ではあるが私の部屋で、年老いた私。つい先ほどまで見ていたと錯覚するほどに見慣れてしまった石造りの重厚な西洋建築の建物の中で、これまた保育士と思しき修道女に口元を拭われているのだ。私にどう笑えと。失笑しか出てこない。

これが病院であればなるほど。私は誰かに介護を受けていると理解できただろう。あの日私は急に体が重くなり、立ってられないほどの睡魔に襲われたのだから、視野の混濁も何らかの病気が原因だったと納得できなくもないのだ。

けれども、はつきりに見えるようになった目が、乏しい光源の中で捉えたのは、古めかしい恰好の修道女たち。光源はやはりというか時代遅れのガス灯。お久しぶりですねと応えた方がいいのだろうか。

「ターニヤちゃん、はい、アーン」

思わず白目をむきそうになった私を、どうか許して欲しい。ああ、本当に全く。やはり存在Xというものは頭の弱い輩だったのだ。

「ターニヤちゃん？　ターニヤちゃん？」

しかしなるほど、道理で既視感があるわけだ。もはや全く同じと言ってもいいだろう。ならばこそ、この世界にも魔法は存在するのだろうか。いやしかし、あの悪魔は確

か……。

「こちらこちら、すっかり口を開けましょうね、ターニヤちゃん？」

「つついっつい考え込んでしまったため、修道女はついにしびれを切らす。

「好き嫌いはいけませんよ。はいアーン」

顔は笑ってはいるが、目は笑っていないとはこのことを言うのだろう。にこやかながらも、拒絶を拒む笑顔で放り込んできた。

煮込んだ野菜。それが私の口を支配する。ああ、やはりか。半ば確信しつつも、ターニヤちゃんとやらが私でない可能性を考えていたのだが……いや、現実逃避はよそう。つまり、私がターニヤちゃんなのだ。

ならばこそ、私は今回も心底叫ぶとさせて頂こう。またか、と。

ああ、これは失礼を、自己紹介がまだでしたね。

私はターニヤ・デグレチャフ。どうやらまたターニヤ・デグレチャフになってしまったようではありますが、まあ、以後良しなに。

1 孤児院と噂

イギリス郊外にある、小さな教会付きの孤児院。その玄関前にいつの間にか名前が入ったメッセージカードと共に捨てられていたのが、私だった。

そしてまあ予想していた通りに、私の3回目の人生の名前は、2回目の名前と同じターニャ・デグレチャフだった。それでは改めまして、ターニャ・デグレチャフでございます。今年で恐らく9歳ぐらいになるでしょう。…あの存在X、面倒くさがったな。

それはさておき、だ。あの悪魔が私を再び転生させるとき、一方的にはあるが、「非科学的な世界で、女で、戦争を知り、追い詰められて尚信仰心が芽生えないのであれば、神を信仰しなければ戦うことすらままならない世界へ転生させ、信仰が芽生えないか試す」とかほざいていたが…これはどうしたことか。

というのもこの世界、いや、この国か。この国では戦争が起きていないのだ。ならば魔法はあるのかと、幼いながらできる範囲で調べたが、魔法の魔の字も見えやしない。

それは勿論、時代も背景に不思議な話を聞くことはあるが、科学の進歩がまるで魔法のような現代日本から転生した私から見れば、原因が何であるかは対外予想ができる。それに2度目の生では魔法そのものを使っていたのだから、たとえ私の知識が

乏しく理解ができない所でも、そうですか、という感想を抱くだけで、別段驚くほどのことでもない。

因みに根も葉もない噂では、人が服だけを残して突然姿を消すという噂や、空を飛ぶ幼女という話が、ここ最近が多い。が、先ほども述べたように少しばかりの興味を惹かれるが、空を飛ぶ幼女など、まさしく前世の私がそうであるからして、特に興味を持つこともない。

もちろん、これから戦争が起こるといふ可能性は捨てきれないことではあるが、あの存在Xがそんな生ぬるいことをするはずがない。信仰心のために、平気で多くの人間の命を奪うあの悪魔は、決して神などではないのだから。

しかし気になるのは、あの悪魔が言っていた「神を信仰しなければ戦うことすらままならない」という言葉だ。これは一体どういう意味なのだろうか？ もし文字通りの意味であるなら、人類は悪魔とでも戦争をしているとでもいうのだろうか。

馬鹿馬鹿しい…と、切り捨てることが残念ながら私にはできない。存在Xがいるのだ。牛頭の翼が生えた悪魔がいても、おかしくはないのかもしれない。

しかし、もし本当にそう言った存在と戦争しているのであれば、少しくらいはその話題を聞くことができるはずだ。それすらない…ということとは？

「ターニヤちゃん？ 食事が進んでいないようだけど、お腹でも痛いのか？」

「あ、いえ、大丈夫ですシスター。考え事をしていました」

「そ、そう？ 食事中はあんまり考え事はしないようにね」

「はい。ごめんなさい」

分からないことをグダグダと考えていても仕方がない……か。私は一度思考を頭の片隅に追いやつて、今は目の前のパンをちぎって口に運ぶことにいそしむことに決めた。

だからだろう。私は周囲の目にまるで気が付くことがなかったのだ。声をかけてきたシスターの様子も、周りの子どもたちの様子も。その目が、少しばかりの恐怖と、不気味で気味が悪いものを見る目であったことなど。子どもたちの目が、何やら監視するような目であったことなど。



「リナリー」

そう兄さんに呼ばれて、私は配っていたコーヒーをリーパー班長に渡してから、兄さんの元に行く。

「どうしたの、兄さん」

「いや、ちよつと任務でね」

「そう…イノセンス？」

「いや、どうやら今回は適合者かもしれないんだ」

「適合者!?!」

イノセンスがあるかもしれないと任務に出かけることは多いけれど、適合者かもしれないということでは任務に出かけることはそう多くはない。

「イギリスの小さな町にね、最近あるうわさが飛び交っているらしいんだ」

「ある噂？」

「そう」

兄さんほもつたいぶるように溜を作る。

「空を飛ぶ幼女」

「空を飛ぶ幼女？」

空を飛ぶ。その言葉を聴いて、何故私が呼ばれるのかを納得する。

「それが本当なら、私が行かないとね」

「そうだね…でも、気を付けてね。既にアクマが侵入しているらしくて、何人かのファインダーと連絡が取れない状況だ」

「なら、急がないとね」

それにしても、幼女…か。

私が考えていることを察したのだろう。兄さんが心配そうに見つめる。

「…できれば、幼女というのがただの噂であってほしいよ」

「…そうね」

「任務は私一人？」

「いや、ブックマンとラビが現地で合流する予定だよ」

「分かったわ。ラビも空を飛べるものね」

私の言葉に、兄さんはそういうこと、とウインクをする。

私はそれに少しばかり笑って。

「それじゃあ、兄さん」

「ああ、ちよつと待ってリナリー」

行つてきます、と言おうとしたところで、兄さんに止められる。

「どうしたの？」

「情報なんだけど…」

そう言つて兄さんは紙が溢れかえつたぐちやぐちな机を漁る。もう、あれだけ掃除

するように言つてるのに。

「はいコレ」

そういつて渡されたのは、古びた教会が映った写真だった。

「これは？」

「この孤児院に、適合者がいる…かもしれない」

「孤児院…」

孤児…ということとは親がすでに亡くなっているのか、それとも捨て子なのか。

親がいない上に、もしかしたら伯爵との戦争に参加しなくてはいけない幼女…か。

「分かった。ブックマンとラビと合流しだい、この孤児院に行ってみる」

「うん。よろしくね」

「うん。いってきます」

「行つてらっしゃい」

黒の教団本部を出る船の上で、私はもう一度受け取った写真を見る。

こんなことを願うのは、エクソシストとしてはいけないことなのかもしれないけど

…。

「どうか、適合者ではありませんように…」

神様、どうか、小さな女の子まで、戦争に巻き込まないでください。